

<研究ノート>

4年間で書く力を伸ばすには — 日本語教育コースの学生指導を中心に —

亀田 千里*・金久保紀子*

What is Important to Develop Students Writing Skills? — Focused on the Students of Japanese Language Teaching Course —

KAMEDA Chisato * and KANAKUBO Noriko *

1. はじめに

大学生の読み書き能力の低下が問題視されるようになって久しい。多くの大学で、特に初年時教育の一環として、学生の日本語による読み書きの力を養成するための授業を設けるようになっている。

例えば京都精華大学は、人文学部の1年生全員を対象にした科目として「日本語リテラシー」を設置し、「読む・考える・書く力」を育成するプログラムを展開している。この取り組みは2006年度文部科学省特色GPに採択されている¹⁾。また、関西国際大学では2000年から初年次の導入教育を重視した教育プログラムの開発に着手し、その成果を学習技術研究会編著(2002)としてまとめた。ここでは、「大学で「学ぶ」ためには聴く・読む・調べる・整理する・まとめる・表現する・伝えると考えるの9つの力が必要(はしがきより)」であるとされ、それらを段階的に身につけることの重要性が強調されてい

る。

本学でも学生の読み書き能力の向上を求める声は多いが、まだ体系的なカリキュラムを構築するには至っていない。

読み書き能力の向上のためには、基本的な技術を身につけることを目的とした授業を設けることも重要だが、専門分野によって、個々の学生に求められる能力の質や量は異なる。したがって、専門の内容を扱う授業の中でも少しずつそれらに関する指導を行うことが必要となる。

筆者たちは本学において、国際交流学科の日本語教育コースに在籍し日本語教員資格の取得を目指す学生の指導に携わっている。2009年春には筑波学院大学として初めての卒業生を送り出す。そこで本稿では、学生の読み書き能力の育成を目的とした教育のあり方を考えるための出発点として、「書く力の養成」に焦点を当て、筆者たちが担当授業の中で行っている試みを紹介する。まず日本語教育コースの学生に求められる「書く力」につ

* 情報コミュニケーション学部国際交流学科、Tsukuba Gakuin University

いて考察する。それを踏まえ、筆者たちが担当する授業の中で、学生に対してこれまでどのような指導をしてきたかを振り返る。そして学生の「書く力」を向上させるためには今後授業内容をどのように改善していけばよいのか、考察する。

2. 日本語教育コースの学生に求められる「書く力」

2. 1 日本語教育コースとは

本節では、本学の日本語教育コースの概略を紹介する。

筆者たちが在籍する国際交流学科には、2008年度現在、国際理解、観光ビジネス、英語コミュニケーション、日本語教育の4つの履修モデルコースが置かれている。日本語教育コースは、外国人に対する日本語教育について専門的に学ぶことを目的とした履修モデルであり、日本語や日本語教育に関する様々な科目を有している。この中で所定の単位を修得した学生には、日本語教員資格を与えられる。

なお、本学における「コース」とはあくまでも履修モデルにすぎず、学生は基本的には様々な分野にまたがって授業を履修することができる。そのため厳密に言えば「〇〇コースの学生」という分類はできないのだが、ここでは日本語教員資格の取得を目指し所定の授業を履修している学生たちのことを便宜上「日本語教育コースの学生」としておく。

2. 2 日本語教育コースの学生と「書く力」

アカデミック・ジャパニーズという考え方がある。大学に必要な日本語能力についての総称で、特に留学生を対象にした渡日前入学許可を目指した「日本留学試験」(日本学生支援機構主催)の試験科目「日本語」で注目されるようになった概念である。

三宅(2005)は、アカデミック・ジャパニーズが意味するところはまだ不確定であるとしながらも、アカデミック・ジャパニーズが、留学生にのみ必要な課題ではなく、日本人学生の成長にも重要な課題であると捉えている。また、大学における日本語教育という分野が、「留学生に対する教育」という枠を超えて存在する意義があることについて、強調している。

日本語教育コースの学生に必要なアカデミック・ジャパニーズ、とりわけ「書く力」とは、いったいどのようなものであろうか。日本語教育コースの学生の場合、「外国人に日本語を教える」ことについて専門に学ぶ。従ってまず、他の学生以上に、基本的な日本語運用能力を身につけることが求められよう。語学教師という立場に立つ以上、漢字や語句の使用から文章の構成に至るまであらゆる面で、日本語を適切に運用する力を磨いておく必要がある。また、レポートやメール、レジュメなどの書き方を学習者に指導する可能性があることを考慮すると、自分自身がそれらの技術を身につけていなければならぬ。

さらに、日本語教育に携わる際には、学習者への日本語指導に加え、教材作り、教案作り、クラス運営のためのミーティングなど、様々な言語活動が求められる。そのため、特に書く力に関しては、以下のような力も必要であると考えられる。

- ・学習者の間違いを的確に指摘・訂正する
- ・学習者に分かりやすく説明する
- ・効果的な教材を作る
- ・授業の教案を作成する
- ・話し合いの議事録を作成する
- ・報告書を作成する

日本語教育コースに所属しているからといって、すべての学生が入学時から書くことにおいて高い能力を有しているわけではない。だが、「外国人に日本語を教えらる人

材の育成」という本コースの目的からすれば、教員は、学生が卒業までに一定の「書く力」を身につけられるよう、常に意識しながら授業を行う必要がある。

そこで次節では、筆者たちの担当する授業の中で現在学生の「書く力」を伸ばすためにやっている試みを紹介しつつ、不足している点や改善すべき点について考察する。

3. 授業における「書く力」養成への試み

3. 1 対象となる授業

筆者たちの担当する授業の中で、特に学生の「書く力」の養成に関係があると思われる科目は、次の通りである²⁾。

●国際交流学科必修

入門ゼミ 2

●国際交流学科の選択科目のうち日本語教育コースの専門的な内容を扱うもの

日本語教育概論 1, 2

日本語概論 1, 2

日本語の文法

日本語の教材

日本語教育研究 1, 2

現代日本語研究 1, 2

●日本語教育コースの学生を対象に開設されているもの

日本語教育方法論 1, 2

現代日本語分析 1, 2

日本語教育実習

●全学対象の選択科目

日本語の使い方 B

以下ではこれらの授業における試みについて紹介、考察する。

3. 2 授業における試みの紹介と考察

●国際交流学科必修

(1) 入門ゼミ 2

これは学生の読み書きの力の養成を目的とした授業で、国際交流学科の1年生全員を対象としている。全学生を2つのクラスに分けて筆者たち2名がそれぞれ1クラスずつ担当するが、カリキュラムは共通している。2005年の開学以来開設されている科目で、2008年度は「メール」と「レポート」の2種の文書の書き方について指導した。

メール作成の回では、学生がよく書くメールの中から「教員にアポイントメントを取る」「教員に自分の現状について知らせ今後の相談をする」という2つの内容を選び、形式や内容の上で留意すべき点について指導した。教員の講義は最小限にとどめて学生自身による活動を重視し、「まず自分なりに書いてみる→学生同士による相互チェック→具体的な例を見ながらポイントは何か考える→書き直す」という手順で授業を進めていった。

レポート作成の指導は、以下の手順で行っている。

- ①先輩の話聞く
- ②レポートとはどんなものか、構成や書き方の手順について簡単に説明する
- ③資料の集め方について学ぶ
- ④序論、本論、結論の順に、例題を使いながら内容や書き方を説明し、実際に少しずつ文章を書かせる
- ⑤学期末にレポートを提出

①は学生の動機付けを目的としたもので、2名の4年生を招き、これまでの大学生活の中で“書くこと”についてどんな授業でどのようなことを要求されたか、ワープロのテクニックはどの程度必要か、卒業研究や就職活動の際に何が必要か、等のトピックについて話をしてもらった。②以降ではレポート作成の回と同様、学生の活動を中心に授業を進めている。

また、学期中に6、7回程度、漢字や語彙に関する小テストを行っている。これは学生に今の自分の漢字力・語彙力を自覚させることを目的としたもので、その点数を学期末の評価には入れていない。出題範囲は、漢字検定2、3級（2005年度～2007年度）の漢字や日本語検定3級（2008年度）の漢字・語彙で、授業の始めの15分程度を割いて行い、自己採点をさせた後回収している。

さらに学生全員に1冊ずつファイルを配付し、授業での配付物や活動の記録をすべて綴じてポートフォリオを作成するよう指導している。これは、必要な資料を整理し保管することを習慣づけるとともに、学生が活動の記録を常に振り返りながら学習する姿勢を身につけることを目的としている。ファイルは最終レポートとともに学期末に提出させ、最終評価の対象にしている。

活動が中心となるこのようなスタイルの授業は学生には新鮮に映るようで、大半の学生は真面目に参加している。特にメール作成の活動においては、身近なテーマであることもあって熱心に取り組んでいる。だがレポートを作成する段階になると、まだ実際にレポートを書くという経験をほとんどしていないこともあってか、あまり目的を十分に理解しないまま活動に取り組んでいるような印象を受ける。最終レポートを書き上げた学生でも、手順を追ってレポートを書くことの必要性やレポートを書くための技術について十分に理解しているとは言い難い。さらに、推敲の経験や論理的な文章を書くことへの慣れがない学生がほとんどで、そのような活動に対する戸惑いも見られる。

本学における現在のカリキュラムでは、日本語の読み書き能力の養成そのものを目的とした1年次必修科目はこの「入門ゼミ2」しかない³⁾。2. 2節で述べたアカデミック・ジャパニーズという観点から考えると本来はもっと多様な文章の書き方を授業で取り上げ

たいのだが、わずか15回というコマ数の中では不可能である⁴⁾。限られた時間の中で効果的に学生の読み書き能力を向上させるために、授業の内容や方法について、更に検討を続けていくつもりである。

●国際交流学科の選択科目のうち日本語教育コースの専門的な内容を扱うもの

(2) 日本語教育概論1、2（金久保）

日本語教育という分野についての知識と理解を深めるための概論である。海外における日本語教育や、国内における多様な日本語教育を紹介しながら、日本語教師の役割を知り、その後の日本語教育関係の授業への基礎を作る、という目的を持っている。

まず、学期はじめのオリエンテーション時には、その時点で考えている学期の目標を無理にでも文字にさせ、提出させている。

授業では、常に問いかける形式をとり、まずは学生が自分で考えてそれを日本語で発話することができるよう、心がけている。書く作業は、話す作業の後になるようにする。

また、「トライアドインタビュー」⁵⁾という形式を導入して、学生に半期に2、3回課題を提出させている。これは3人組になってあるトピック（例「日本語の授業において媒介語はどういう役割があるのか」）について話す活動で、話す・聞く・書く役割をそれぞれ学生が担う。最終的に他の学生の意見を書き取ってまとめた学生が、300字程度の作文をメールで課題として提出する。提出された作文は、全体を編集して、必ず全員分が互いに見られるようにしている。この授業の受講生は2年生が中心であり、他の学生の目に触れることが確実なタイプの作文（報告書、レポートなど）を作成した経験がほとんどない。そのため、このような活動は非常に効果的である。

最終評価のうち40%を占める期末試験は、教科書以外の資料を持ち込み可、とし、短い

時間での確に答える力を問えるよう、工夫している。

書く作業への慣れは学生によって異なるので、学生の最初の時点の状態とその後の経過をよく観察できるよう、今後も定期的に書かせる作業を取り入れたい。また、現在の授業の方法では、自分の意見を言えることまではできるようになっても、資料を探す、資料をまとめる、といったストラテジーについては、授業の中で十分に扱えていない。この点については今後改めて考える必要がある。

(3) 日本語概論1、2 (亀田)

(4) 日本語の文法 (亀田)

「日本語概論1、2」は、音声、文字、文法、語彙など、日本語学の基礎的な知識を身につけるための授業である。また「日本語の文法」は、「日本語概論」で扱った内容をベースに、日本語の文法の仕組みを理解することを目的とした授業である。どちらの授業も講義中心で、最終評価は期末試験等によって行う。ほぼ毎回、授業の最後に小レポートを課し、その日の授業の内容に関連した問いを出してその場で考えて書かせ、提出させている。受講生は2、3年生が中心である。

この2つの授業はいずれも大学の授業としては一般的な形式であると思われるが、「書く力の養成」という立場から考えると、改善の余地があろう。例えば授業ごとの小レポートの課題の中に、ある項目についての説明など何らかの短い文章を書かせるような課題を時々取り入れ、その中で漢字や語句の使い方、文章の組み立て方などを教師がチェックし必要に応じて指導することにより、学生の書く能力の向上に貢献できると思われる。

(5) 日本語の教材 (金久保)

この授業は、日本語概論、日本語教育概論といった授業を履修した学生を対象に行っている。日本語教育の教材を概観した上で詳し

く分析し、最終的には、対象となる学習者を具体的に想定した教材を作成している。

教材の分析の段階では、図書館を活用し、資料を探す、まとめるという作業が中心となる。ある教材に関する情報を、それを知らない人に伝えることを主眼にして、レジュメを作成することが要求される。文字情報だけでなく、視覚情報も多用したレジュメの作成を指導している。

同様に、教材の作成の段階では、学習者の利便性を意識した教材を、的確な材料（手書きかワープロ打ちか、イラストを用いるか写真を用いるか、など）を使いながら作成できるかが重要なポイントとなる。

最終レポートでは、自分の作成した教材を紹介した後、他の学生からどのようなコメントが寄せられたか、改善できる箇所は何か、を加味して論じることを要求している。この段階で問題だと考えられるのは、寄せられたコメントを客観的に見ることができずすべて鵜呑みにし、作成者の意図から外れることも構わずに教材を改訂しようとしてしまう学生がいることである。他人のコメントの内容を冷静に分析することができるよう、指導をしていく必要があるだろう。

(6) 日本語教育研究1、2 (金久保)

この授業では、日本語教育の方法についての理解をさらに深めるために、実践的な例を扱いながら考え方の整理をしている。『日本語教師の役割／コースデザイン』（国際交流基金 日本語教授法シリーズ1）のタスクを利用し、ディスカッション形式での授業を行っている。受講生は3、4年生である。

考えていないこと、話したことがないことは書けないのでは、という立場から、授業で扱った内容を後日まとめて作文し提出するという課題を出している。その結果、学生は、自分の意見と他の学生の意見を分けて書くことができるようになる。

問題としては、考えを補強するための資料やデータを利用した書き方の指導ができないことにある。授業内容に基づいた内容以上の的確な資料の探し方、引用の仕方の指導が不十分であると考えている。

(7) 現代日本語研究 1、2 (亀田)

現代日本語に関する専門的な論文を読んで様々なトピックに触れることを目的とした、3、4年生対象の授業である。学生の発表が中心であり、「論文の内容を的確にまとめ、聞き手に分かりやすく伝える」「論文の内容について批判したり自分の意見を述べたりする」力を養うことも目指している。学生の発表は半期に2、3回のペースで割り当てられる。そして最終レポートでは、自分の興味のある分野についていくつかの先行研究をまとめ、考察することを課している。

3年生の場合、論文を読んだりレジュメを作ったりすることにまだ慣れていない場合が多い。レジュメはなるべく発表前に教師が目を通し、改善点を指摘するようにしている。また発表の際も、論文の中で重要なのはどの部分か、どうまとめれば聞き手に分かりやすいか、といったことについて教員がアドバイスをしている。1回目の発表ではうまくまとめきれなかった学生も、回を重ねるごとに分かりやすいレジュメを作り、上手に発表できるようになる。

だが、発表した論文に対する考察をまとめる段階になると、単に「勉強になった」「おもしろかった」といった感想の域にとどまってしまう学生が多い。また口頭では興味深い指摘をすることができるにも関わらず、それをレジュメにまとめきれない学生もいる。自分自身の考えをいかに文字で表すか、という点について、今後指導を重ねる必要がある。

●日本語教育コースの学生を対象に開設されているもの

(8) 日本語教育方法論 1、2 (金久保)

実際に学習者を指導することを前提にした授業である。3、4年生を対象としている。学生は、授業時間内に学習者を呼んで、そこで準備した内容で授業を行い、その後教員からのフィードバックを受ける、という形式で授業に取り組んでいる。2008年度は、毎回4名ほどのさまざまな国籍の初級学習者が参加している。

学習者に対してどのような授業を行うか、担当する学生が毎回考え、教案を作成している。教案では、授業の目標、時間配分、学習者の活動、教師役の学生の動き、教材、考慮すべきことなどの項目を盛り込み、教員のチェックを数回受ける。この過程を通じて、視覚的に見やすい書式、情報を整理することについても意識が及ぶようになる。

学習者の指導に主眼がある授業なので、学生個人の書く力を重視した活動は十分に行えていない。例えば学習者へのフィードバックを学習者が理解できる程度の日本語を使って表現する練習を行うなどの工夫を、今後実施したい。

(9) 現代日本語分析 1、2 (亀田)

この授業は、学習者のスピーチや作文の分析を通じて学習者の誤用の特徴を把握するとともに、その訂正の仕方について学ぶことを目的としている。作文の分析を行う後期の授業を例にとると、学生は学習者の作文をまず自分で添削し、次に、どこをどう直したか、修正部分を学習者にどう説明するか、といった点について他の学生に説明する。その後、その添削について学生全員でディスカッションを行い、学習者の日本語のレベルを考慮した適切な添削とは何か、という問題について考える。

「添削する能力」は日本語教師に求められる「書く力」の1つであり、その点においてこの授業は学生の書く能力を養うために重要

な役割を担っている。また、漢字や語句、文、文章の構成など様々な観点から学習者の作文を検討するという作業を通じて、学生が自分の言語感覚を磨き、自らの日本語運用能力を伸ばすことにも貢献している。

添削に慣れていない学生も多いことから、現在は比較的短い文章を素材としていることが多い。そのため語句や文法の添削が中心となり、文章の構成の添削を行うことはあまりない。今後はまとまった分量の文章の添削も取り入れていきたいと考えている。

(10) 日本語教育実習（科目担当：金久保、補助：亀田）

日本語教育関連の授業の仕上げとして、4年生を対象に行われる実習である。ここ数年は、交流協定を結んでいる中華大学（台湾）からの短期研修生を対象に、夏に実施してきた。2008年度からは、実習の単位数が2単位から4単位になったことに伴い、中華大学生を対象にした夏の実習に加え、春休みにも大学近辺に住む外国人を対象とした実習を行っている。

実習では、学生が授業内容の立案、教材準備、教案作成をすべて行う。その過程では、自分の考えていることを指導教員に正確に伝えることが求められ、口頭表現の力と同様に、文字表現力が重要となる。4年生が実習の参加者であるので、3年間でどの程度の力が付いたかが、判明する。また、学習者に向けて作文や会話のフィードバックをすることがあるため、学習者にわかりやすい表現・語彙を意識するよう指導を行う。

今後は、全員が参加して執筆する最終報告書のような冊子をまとめ、自分たちのしてきたことを振り返るような成果物があってもよいと考えている。また、日本語教師、という目標に向けての実習であることを考慮すると、日本語教師として必要な日本語力が何か、を改めて明らかにする必要がある。その

ためには、書く力、話す力共に、外的な基準に基づいた判断が必要かもしれない。

●全学対象の選択科目

(11) 日本語の使い方 B（亀田）

「書く、とはどんな作業か」「聞き手を意識して書く、とはどういうことか」など、「書くこと」に対する意識を高めることを目的とした授業である。学期中に5回程度、編集者や翻訳家、脚本家など「書くこと」を職業としている社会人を外部講師として招き、講義をしてもらっている。さらに、外部講師の話をもとにまとめる作業を意識的に行うことにより、「ノートをもとめる力」を伸ばすことも目指している。

大学の教員ではなく社会人の話を聞くことにより、学生は「書くこと」を「仕事」に結びつけながら考えることができる。そして「書く力」が学生の期間だけではなく将来的にも必要になるのだということを理解できる。「書く技術」そのものの養成に直接関わる部分は少ないものの、この授業で行う「書く」という行為の意識化は、学生の関心を「書くこと」に向けさせ、その技術を磨くための基礎になると考えられる。

この授業は就職支援科目の1つであり、学科や学年を問わず幅広い学生が受講している。これまでにこの授業を受講した日本語教育コースの学生はごく一部だが、「書くことの意識化」を扱う科目は他にないため、今後は積極的に受講を促していきたい。

3. 3 その他の活動

つくば市内に居住している外国人に向けての英字情報誌「エイリアンタイムズ」に2007年9月から毎月、学生の作文を寄稿している。英字情報誌ではあるが、日本語を学習している方からのニーズもあり、日本語版、およびローマ字版、語彙の英訳をつけた形式で寄稿を始めた。

学生たちにとっては、日本語能力検定試験 3 級程度、という読者を想定し、レベルにあった文型・語彙による作文を書くトレーニングとなっている。さらに、自分の名前が載った情報誌が出来上がることで、書くことについての一つの動機づけになっている。

学外の人が読む情報誌への寄稿という活動を通じて、学生は改めて「読み手を意識して書く」ということに意識が及ぶようになる。今後はこのような活動も積極的に取り入れていきたいと考えている。

4. 全学的な指導に向けて

3 節では日本語教育コースに関わる筆者たちの授業を振り返りながら、日本語教育コースの学生における「書く力の養成」について考えてきた。現在のところ、筆者たちの担当する授業の中では、程度の差はあるものの、2 節で述べた「日本語教育コースの学生に求められる書く能力」を養うための活動をできるだけ取り入れるように努めている。現 4 年生が行った夏の日本語教育実習の中で学生たちが作成した教案や議事録、報告書などに目を通す限り、入学当時に比べると自分の考えをまとめて書く力における飛躍的な伸びが認められる。学内関係者に出すメールについても、下級生のものとは比べ、形式・内容ともに整ったものを送れるようになっている。これらの状況から、日本語教育コースの学生に関しては「書く力」の養成における 4 年間の指導の一定の成果が出ていると言えよう。今後とも学生の現状とニーズに常に目を配りつつ、指導方法や内容について改善を加えていきたいと考えている。

ところで、「書く力」はあらゆる学生に求められるものであり、今後は全学的にどのような教育を行っていくべきかを考えていく必要がある。以下では、今後の指導に向けて考えなければならない問題についていくつか列

挙する。

①外的基準の利用

「書く力の養成」をするにあたり、まず学生と教員の両者に求められるのは、学生がどの程度の日本語運用能力を持っているかというのを客観的に把握することである。そのための 1 つの手段として、外的基準の利用が挙げられる。

2008 年度に初めて、日本語検定委員会が開催する日本語検定⁶⁾を学内で実施し、日本語教育コースの 3、4 年生にも受験を促した。社会人・大学生・高校生を対象とした 3 級の試験に臨んだが、残念ながら合格率は決して高いものではなかった。自らの日本語の基礎力を把握し伸ばすための目安として、漢字検定や日本語検定などの試験を利用するのは有効であると考えられる。今後はどのような試験によってどのような力が把握できるのかを慎重に見極めつつ、うまく利用していくことが有益であろう。

②様々な授業における「書く」活動の意識的な導入

漢字や語句の適切な使用にせよ、文章の構成力にせよ、それについて学ぶことを目的とした授業をいくつか設ければ飛躍的に伸びるというものではない。「書く」練習を継続して積み重ねることにより、初めて身につくものである。そのためには、より多くの授業の中で「書く」という活動を意識的に取り入れていく必要がある。

特に、「内容、読み手、目的を明確にした文章を書く」という機会は、より多く設けられるべきだと考える。

当たり前のことであるが、そもそも「何を書くのか」が明確でなければ、書くという行為はできない。例えば何かについてレポートを書くという課題を与えたとき、「何を書いたらいいかわからない」と戸惑う学生が少

なくないのは、教員に提示された大きなテーマの中から自分が書くべき具体的なテーマを見つけることができないことにも一因がある。また、メールでもレポートでも、「何のために書くのか」「誰に向けて書くのか」を十分に意識しながら言葉を紡ぎ出すことが重要だが、その作業に慣れていない学生が多いように見受けられる。

日本語教育コースの学生の書く力に伸びが見られた大きな理由の1つとして、彼らが授業などを通じ、学習者への指導等において自分が経験したことを書いてまとめる機会が多いことが考えられる。一般的に、「経験したことを書く」という行為は、書く内容が明確である分、自分の意見を書くなどの行為に比べて取り組みやすい。自分の経験をまとめて書く練習を積み重ねることにより、次第に、自分の考察をまとめることもできるようになる。また、彼らが「学習者」という明確な相手を常に意識する状況にあることも、「書く力の伸び」と無関係ではないだろう。学習者に向けて説明の仕方を考えたり教材を作ったりすることを通して、「読み手を意識した文章作成」「目的の明確な文章作成」に対する意識を高めることができたのではないだろうか。

より多くの授業で、より多くの内容・読み手・対象を意識した文章を書く機会を設けることが、今後求められよう。

③各専門分野で求められる「書く能力」の明確化

例えば2節では「日本語教育コースの学生に求められる書く能力」について挙げたが、学生の専門が違えば当然、要求される「書く力」も異なってくる。

日本語教育コースの学生の場合、資格の取得という目的があり、履修すべき授業もある程度決められているので、授業をまたいだ体系的な教育を比較的行いやすい。学生が複数

の分野にまたがって授業をとることが多い本学においては、他の分野で同様の取り組みをするのは難しいかもしれないが、少なくとも履修モデルコースを学生に示している以上、そのコースにおいて学生にどんな「書く力」を求めるのか、という点については明確にする必要があろう。そしてそれを養成するために、関係する教員が意識を共有し、授業をまたいだ取り組みを行っていくことが望まれる。

④本学学生の持つべき「書く能力」に関する全学的な共通理解の形成

1年生の必修科目を担当して感じるのは、学生の「書く力」は、入学時点においてすでに大きな差があるということである。他の学生に比べて著しくその能力が低い学生をどのように指導し4年間で一定のレベルまで引き上げるかということについては、全学的な理解と取り組みが求められる。一部の教員だけに任せられる問題ではない。

また、現在本学には約70名の留学生在籍している。1、2年次の留学生を対象に、書く力の養成を目的とした日本語の授業は設けられているが、そのような授業は留学生在が4年間で取るべき授業のうち、ごくわずかである。従って留学生在にどのような「書く力」を求めるのかという点については、日本語教育を担当する一部の教員だけでなく、全教員が共通の理解を持ち適切な指導を行う必要があろう。

そしてその前提として求められるのは、本学の学生が有すべき「書く力」について、全学的な共通の理解や方向性を形成することである。つまり、専門性ばかりでなく日本語運用能力においても、本学がどのような人材を育成し社会に送り出すかということについて、思想のある教育を行うことが求められよう。その上で、個々の学生にどのような指導をしていくべきなのかを考えていくべきであ

と思われる。

5. おわりに

本稿では、日本語教員コースで筆者たちが担当する授業を振り返りながら、日本語教員コースの学生に対する「書く力」の養成について考察してきた。またそれをもとに、全学的な教育に向けて取り組まなければならない課題について考えてきた。

「書くこと」だけでなく、読む・話す・聞くということも含めた日本語運用能力全般を養成するための教育をいかに行っていくかは、今やどの大学においても避けては通れない課題である。本学もより教育内容を充実させていくために、本学の学生にとって必要な日本語運用能力は何か、どんなカリキュラムを用意すればよいか、といった問題について早急にかつ慎重に考えていく必要がある。

注

- 1) 詳細は京都精華大学教育推進センター日本語リテラシー教育部門HPを参照のこと (<http://cet1.kyoto-seika.ac.jp/literacy/>)。
- 2) 授業は日本語教育実習を除き、半期開設科目である。科目名に1、2と数字のついているものは、「1」を前期に、「2」を後期に開設している。

- 3) 前期に行う「入門ゼミ1」という授業でも文章の読み方や書き方について取り上げているが、こちらは国際交流学科に関係のある分野の基礎的な知識を身につけるという目的も持っている。また、「入門ゼミ2」は国際交流学科だけの必修科目であり、日本語の基礎的な運用能力の養成に関わる全学的な必修科目は現在開設されていない。
- 4) この授業が始まった2005年度には「メール作成」「企画書作成」「要約」「レポート作成」の4つの活動を取り上げていたが、レポート作成にかかる時間が足りず十分な指導が行えなかったという反省から内容の見直しを行った。
- 5) 早稲田大学向後千春研究室 HP を参照のこと (<http://kogolab.jp/mt/>)。
- 6) 日本語検定についての詳細は <http://www.nihongokentei.jp/> を参照のこと。

参考文献

- 学習技術研究会編著 (2002) 『大学生からのステディ・スキルズ 知へのステップ』くろしお出版
- 三宅和子 (2005) 「大学における『日本語』教育の総合的展開」『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ (2)』(平成14-16年度科学研究助成金 (基盤研究 A) 研究成果報告書 研究代表者: 門倉正美)